



## 馬 耳 東 風

7月の終わり、出光美術館で「没後90年富岡鉄齋展」を鑑賞した。10年前にも観たが鉄齋の作品には常に新鮮で深い感動を与えてくれる。時折、美術館の常設展でも鉄齋の作品を目にするが百余点もの作品が一堂に会すると圧巻で、3時間、鉄齋の世界に浸った。鉄齋は1837年に生まれ、1924年に没した。日本における近代美術史の本流には名は見当たらないが、1903年に読売新聞が選んだ「明治の人物一千人」に名を連ねているという。鉄齋は常に「自分は独学で南画を学び師というものは持たなかった」と言い、当時の流派に拘束された画壇とは一線を画し、孤高を貫いた巨人だったのだろう。鉄齋は「自分は儒者であり、余技として南画を描いている」と、画家と呼ばれるのを嫌ったと言われているが、他の画家の作品とは全く異なる独自の世界を築いた偉大な画家であったことは万人の認めるところであろう。膨大な書籍を読み、明治維新・文明開化の奔流の中を生き抜いた強靱な精神を持った鉄齋が描いた自由で大胆な「鉄齋ワールド」を観ると「儒者」を自負していた気持ちが解るような気がした。鉄齋は「絵を見る者はまず画賛を読んでくれ」と言っているが、自分には残念ながら画賛を読み、描かれた画の背景を理解するほどの教養はない。それは「万里の道を行き、万卷の書を読まねば真の画家とは言えない」という鉄齋の歩んだ道を辿る者にしか理解できないのかも知れないと思うことにした。

若い時代の画からは当時の日本画、南画、水墨画などの様式を意識したと思われる、対象を画面に写すような

作画姿勢が感じられ、やや堅い印象を受けた。しかし、60歳頃以降、伝統的な様式から脱し、自由奔放に画面上を筆が走りだし、特に、80歳以降の晩年の作品には前に立つ人を魅了する自由闊達さが溢れ出ており、その筆跡を追っていると動けなくなる。それは老境に入った鉄齋がたどり着いた桃源郷のようで、山水画の中に配された人物と語り合い遊んでいるような感覚になる。画面に踊る「線」は一見すると無造作に何気なく引かれたかに見えるが、運筆の速さから来ると思われる力強さは非凡である。元々、南画・日本画の世界では「線」が重要であり、画家が全力を集中して引く線には、その画家の器量が現れると思っている。渡辺華山、川合玉堂、前田育邨など多くの画家が研ぎ澄まされたような素晴らしい「線」を描いているが、鉄齋の「線」はそれらとは異質で、筆を踊らせ墨を画面に置いて行くような豪快さを感じさせる。ただ一本の「線」、ある絵画コレクターが川合玉堂に「サーと描いた作品がこれほど高価に売れるとは…」と言ったところ玉堂は「この線を描くのに60年かかったのだ」と答えたという。

昨年、世間を騒がせた日展問題も組織改革を公表したことで一段落した。この拙文が本誌に掲載される頃には今年の日展も閉幕する。不正審査問題を契機に改革が断行されたと言われるが、「改組新日展」が真の意味で我が国で最高の公募展に生まれ変わるのか。算術に流される今の画壇の病根の深さを思うと気持ちが沈むが、一本の「線」に釘付けになった鉄齋の世界に思いを馳せつつ、来年こそ夢が語れる時代になってほしいと祈っている。(青)